

主日礼拝説教「あなたにも生きてほしいから」予稿

日本基督教団石神井教会 2017年6月18日

【旧約聖書日課】エゼキエル書 18章25～32節

²⁵それなのにお前たちは、『主の道は正しくない』と言う。聞け、イスラエルの家よ。わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。²⁶正しい人がその正しさから離れて不正を行い、そのゆえに死ぬなら、それは彼が行った不正のゆえに死ぬのである。²⁷しかし、悪人が自分の行った悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、彼は自分の命を救うことができる。²⁸彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。²⁹それなのにイスラエルの家は、『主の道は正しくない』と言う。イスラエルの家よ、わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。

³⁰それゆえ、イスラエルの家よ。わたしはお前たちひとりひとりをその道に従って裁く、と主なる神は言われる。悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。罪がお前たちをつまずかせないようにせよ。³¹お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。³²わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」と主なる神は言われる。

【使徒書日課】使徒言行録 17章22～34節

²²パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。²³道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見て、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。²⁴世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。²⁵また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。²⁶神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。²⁷これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおりられません。²⁸皆さんのうちのある詩人たちが、

『我らは神の中に生き、動き、存在する』

『我らもその子孫である』と、

言っているとおりです。²⁹わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。³⁰さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。³¹それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。」

³²死者の復活ということを知ると、ある者はあざ笑ひ、ある者は、「それについては、いざれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。³³それで、パウロはその場を立ち去った。³⁴しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またグマリスという婦人やその他の人々もいた。

【福音書日課】マタイによる福音書 3章1～6節

1そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、2「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。3これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

4ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。5そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、6罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

すべてのものを与えてくださる

聖霊降臨日（ペンテコステ）と三位一体主日を経て、今日から「週報」には「聖霊降臨節」という呼称を記しています。教会暦の期節を示すカラー（典礼色）も、聖霊降臨日には「赤」、三位一体主日には「白」でしたが、今日から「緑」を用います。「緑」は、「自然色」として用いられてきた色です。陽光をいっぱい浴びて生い茂る草木の葉を思い起こせば、神によって造られた世界の「自然」の色を「緑」で表すのは当然のことかもしれません。これから夏を迎えようという季節に、教会の暦を示すカラーが「緑」になるというのも、必然のようにも思えます。もっとも、教会がこの期節に「緑」色を用いるのは、自然の四季に合わせたわけではないでしょう。教会が用いる「緑」色には、生い茂る草木の葉ばかりではなく、もっと様々な、あらゆる被造物、この世界に神から与えられているすべてのものを指し示す意味が込められているからです。

皆さんの中には、季節を選んで、山や海など自然豊かなところを旅行される方がいらっしゃるでしょう。豊かで美しい自然をご覧になられて、天地を造られた神の創造の御業のすばらしさに感嘆させられたという体験談をお聞かせいただくのは、楽しいものです。教会のある石神井の町は住宅地とは言っても比較的自然而が多く残されている地域だと思いますが、それでも、本当に自然豊かなところと比べれば、ここも人工物のあふれた都会なのだと思います。そのようなところに住んでいるわたしたちにとっては、ときに大自然に囲まれたところを旅して、豊かで美しい自然を満喫するということが、心身のバランスを保つためにも必要なかもしれません。けれども、もしも、都会を離れて自然豊かなところに行かなければ創造主の御業をおぼえ感謝することは難しい、と考えるならば、それは少し違うかもしれません。

確かに、豊かな自然、美しい緑の草木も、神がお造りくださったものです。しかし、その美しいと思う自然だけでなく、わたしたちがときに恐ろしいと思う自然、脅威に感ずる自然も、すべて神がお造りくださったものであるはずです。わたしたちが信じる神は、「**世界とその中の万物とを造られた神**」だからです。木々や草花、美しい山々や海の白波をお造りくださったお方は、同時に、荒れ果てた砂漠や険しい山々、荒れ狂う大海原をもお造りくださったお方なのです。わたしたちがしっかりと立つことのできる大地をお造りくださったお方は、すべてのものを飲み込んでしまう大海をもお造りになられたお方なのです。そればかりか、わたしたちが手を付けることのない諸々の自然をお造りくださったお方は、わたしたちが手を付けて、思い通りに人工物に仕立て直してしまったようなものさえも、その元になるものをお造りくださっていたお方なのです。「**すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神**」と使徒パウロが語っているのは、そのような万物をお造りになられたお方のことでしょう。

聖壇の「緑」色は、そのような神の創造の御業の世界を指し示します。あらゆるものが、神の御手から与えられたもの。そのことを突き詰めて問うことなしに、パウロは、アテネの人々に福音を語るができなかったのです。

皆が悔い改めるように！

今日の使徒言行録の伝える物語は、使徒パウロの二回目の宣教旅行の一コマです。この宣教旅行を、パウロは、一回目の宣教旅行を共にしたバルナバとはチーム編成のことで意見が合わず別れて、別のチームを率いて進めていました。ところが、この宣教旅行は、きちんとした計画によらず、言ってみれば出たとこ勝負で行き当たりばつたりのものになっていたのです。ギリシアの諸都市を北から南へと辿ってきていましたが、ギリシア文化の中心地アテネにたどり着いたのも、直前に滞在した町で大騒動になり、慌てて逃げてきた結果でした。遅れてくるはずのチームの仲間たちを待つ間、パウロらはアテネの町に滞在し、そのわずかのときを、宣教活動に充てたのです。

パウロらの宣教方法は、どこの町に行っても、まず同胞ユダヤ人を見つけて、彼らに宣教し、そこから周囲に広げていく、というものでした。アテネにも、その取っ掛かりとなるユダヤ人の会堂がありました。パウロらは、そこで福音を語り始めましたが、すぐに、会堂の外でも語ることになったのです。アテネには、多くの知識欲旺盛な人々がいたからです。その多くは、ユダヤ教や聖書に関心のあるような人々ではなく、ギリシア哲学に通じ、さらに新しい教えを吸収したいと考えているような、教養ある人々でした。そのような人々の中に、パウロという男が従来のユダヤ教とも異なる新しい教えを語っていると聞きつけて、話を聞きたいと考えた人々がいたのです。そのような人々の口コミが広がったのでしよう、パウロは、アレオパゴスという丘の上の広場に引っ張って行かれて、そこで、自説を語るように求められたのです。

パウロなりに考えて、ユダヤ教も聖書も知らない人たちに伝わる言葉で語ろうとしたのでしよう。他のところで語ったとされる説教とは、ずいぶん語り口が違います。確かに、わたしたちが礼拝で語ったり聞いたりする説教も、会衆の構成が変われば、どのように語るかが変わってくるものです。相手が誰であろうと同じ説教、というのは、わたしたち牧師の感覚でもあり得ないことです。しかし、そうだとしても、相手によって語り口が変わり、どのように語るかが違ったとしても、説教で最終的に伝えるべきことが異なるわけではありません。

その、変わらず最終的に伝えるべきことの 하나가、悔い改めの勧め、でしょう。パウロも、この説教の終わりのほうで、「**神は…今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます**」と告げています。宗教改革者 M・ルターが、その改革の端緒となる「95 箇条」の最初に掲げたのは、「**私たちの主であり師であるイエス・キリストが、悔い改めなさい、と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである**」という提題でした。主イエスが、宣教の初めに「悔い改めよ」（マタイ 4:17）とお教えになられたのです。しかし、それ以前に、洗礼者ヨハネも「**悔い改めよ**」と教え、エゼキエルを始めとする預言者らも、「**悔い改めて…立ち帰れ**」と繰り返し告げていました。悔い改めの勧めは、聖書を貫く、見落としてはいけない使信なのです。だからこそ、わたしたちも、礼拝ごとに「罪の告白」をして悔い改めに導かれているのです。

神がそこまで！

そのように見てくると、疑問が湧いてくるかもしれません。「悔い改め」を、旧約の預言者らも繰り返し告げていて、洗礼者ヨハネも教えていたのだとすると、主イエスの悔い改めの教えは二番煎じのようなものなのだろうか。そうだとすると、ルターが言うように、悔い改めの教えを主イエスだけに帰するのではなく、「聖書が悔い改めよと教えているとき、聖書は、信じる者の全生涯が悔い改めであることを求めているのである」と書き換えるべきなのではないだろうか。

もちろん、わたしたちは、ルターの真意を知っています。主イエスこそが「悔い改めよ」とお教えになられたというとき、わたしたちは、主イエスにおいてこそ「悔い改め」が本当の意味で可能になった、ということ告白しているのです。

それは、「悔い改め」そのものが主イエスによって何か新しいものになった、ということではありません。「悔い改め」は、旧約の預言者が語ろうと、洗礼者ヨハネが語ろうと、一つのことです。それは、神の御心であり、神の罪深い人間に対する目標であり、「神に背を向けていた人間が神のほうに心向け直すこと」です。「悔い改め」は、わたしたちが自分の犯した行為を反省したり省察したりするというのではなく、わたしたちがあらぬ方向に向けていた心を、本来向けるべき方向に向け直すこと、神に向け直すことです。だからこそ、預言者エゼキエルは、「悔い改めて…立ち帰れ」と告げるのです。神に背を向けていた人間が、心を向き直して、神の前に進み出る。そのことを神が人間に願ってくださっていて、そうなることを人間に対する目標としてくださっている。それこそ、主イエスだけでなく、聖書が一貫して、わたしたちに告げていることです。

けれども、その悔い改めを、わたしたちは、できるのか。そこが、最大の問題でした。ある人たちは、できると考えました。聖書の正しい知識を身に着けることによってできる、と考える人たちがいました。あるいは、正しい儀式を行うことでできる、と考える人たちがいました。正しい宗教的生活をすることでできる、と考える人たちがいました。

主イエスは、できない、とお教えになられたのです。「悔い改めよ」とお教えになられましたが、それを人間はできない、ともお教えになられたのです。ただ、人間にはできないが、神にはおできになる、とお教えになられたのです。どのように、できるのか。頑なに悔い改めを拒み、背を向け続け、遠く神から離れようとする人間の、その最果てのところまで、神ご自身がおいでになられて、御顔を向けてくださることによって、です。そして、そのように御顔をお向けくださった者を、ご自身のもとへとお連れくださることによってです。

パウロや弟子たちが主イエスの十字架の死と復活によって語り示そうとしたのは、そのような神によってなされる悔い改めの実現です。神は、そうして、すべての者が悔い改めに至ることができるようにしてくださったのです。それは、嘲笑すべき教えでしょうか。神が万物をお造りくださり、すべてのものをお与えくださるお方であるならば、あり得ることなのではないでしょうか。そのようにしてでも、神は、あなたにも真の命を得てほしいと願ってくださっているのです。